最優秀賞　小学生の部

宗左近賞

心もまっ赤だな

牧山小学校　三年　元野（もとの）　愛美（まなみ）

秋のはじめ、木の葉がひらりひらり。
いちょうの山がどんどんつもる。
黄色や赤色の秋がふってくる。
ひらり、ひらり。一まい、一まい。
しぜんの絵かきさんが作る。
木の葉はかれると思ったら、
きれいな秋がつもってた。
すぐ近くの公園から
山の高いとこまで少しずつ、少しずつ。
きれいな、きれいなしぜんの絵
ずっと見ていたら
わたしの心にも
きれいなもようがもえていた。
まっ赤な夕日。
まっ赤なわたし。

みずかみ かずよ賞

お空にでんわ

戸畑中央小学校　二年　大石（おおいし）　寛子（ひろこ）

夏休みのおわりのかぞくりょこう
たった一回だけのかぞくりょこう
いとこのかぞくもいっしょのりょこう
はじめにゆうえんち
一ばん楽しみなパレードのときになって
雨が　ぱっぽろ　ぱっぽろ　ふりだした
そしたら　ほうそうがながれてきた
「雨がふってきけんなためパレードは中止します。」
雨は　ぞばらーぞばらー　ふっていた
ゆうえんちにいる間じゅう
心の中やこえに出して　何回も言った
「お天気のバカ　お天気のバカ
さいてい　今日　こなければよかった。」
よるのテレビの天気よほう
「あしたもお天気はぐずつくでしょう。」
そんなことを言われたら
わたしが天気でもぐずつきたくなる
だからやっぱり　つぎの日も雨がふった
「天気よほうのバカ　天気よほうのバカ
さいていなりょこう　こなければよかった。」
わたしは　また何回も言った
夏休みのおわりのかぞくりょこう
たった一回だけのかぞくりょこう
いとこはいえにかえって言ったんだって
「雨ふったらいけんよね　言わんないけんね
お空にでんわして　雨ふったらだめよって。」
なんで雨ふるの
わたしは　天気も天気よほうも
そんなことしたら　こまるだろうなと思った
お天気もたいへんですね
でも　こんどは晴れにしてね

講評

平出　隆（ひらいで　たかし）

小学生の部の宗左近賞は、「元野愛美さんの「心もまっ赤だな」です。木の葉が落ちる秋の光景を書いていますが、「秋がふってくる」「秋がつもってた」という表現は、素直でありながら飛躍もあり、自然でありながら強い力をもっています。「ずっと見ていたら／わたしの心にも／きれいなもようがもえていた」というところ、美しいものを見つめることの先に、さらに新しい次元が開かれ、「も」の音が三つ、言葉の音楽を生み出しています。「まっ赤な夕日。／まっ赤なわたし。」という終りかたも、秋の夕日と一体になって、素晴しいものです。

みずかみかずよ賞は大石寛子さんの「お空にでんわ」です。雨の降りかたを「ぱっぽろ　ぱっぽろ」「ぞばらーぞばらー」というところ、語感が鋭くてユニークですね。大事なときに雨に降られたことに「お天気のバカ」「天気よほうのバカ」と毒づいておいて、最後には、「天気」の気持と「天気予報」の気持になってあげる。さらに「でもこんどは晴れにしてね」と付け加えることも忘れない。なかなか生き生きとして大胆なパフォーマンスです。

中学生の部の宗左近賞は、吉永明日香さんの「岩の心」です。無機的なモノの中にも「心」があるかのように想像して詩を作るのは、めずらしいことではありませんが、多くの場合、途中から、想像している作者自身の心に戻ることが多いでしょう。しかしこの詩は、最後まで「岩の心」になって語りつづけています。自信を持ってこの書きかたを貫いています。それでこそ、「岩の心」がよく見えてくるのでしょう。

みずかみかずよ賞は、細川奈留海さんの「日本語が好き」です。具体的に「群青」や「おかあさん」や「紅葉」ということばを見つめながら、表情豊かな日本語を愛でている詩ですが、「ほら、好奇心はつきない」というところに作者の喜びの声が聞えるようです。最後の「日本語は広い」という、ちょっと通常とはちがういいまわしに、作者の発見があります。

全体で印象に残ったのは、中学生の部でのよい作品は、どれもみな、よく「苦しみ」と向き合っている、ということでした。「苦しみ」をくぐりながら見つけられることばは、輝きだけではない強さを持ってあらわれます。

一方、小学生の部では、これは毎年のことですが、生命のありかたを発見し、それを見つめての喜びが目立ちました。このような詩の中では、見つめる力が強ければ強いほど、喜びも強くなります。

平出　隆

北九州市門司区生まれ。
詩人・作家・多摩美術大学芸術学科教授。装幀家、造本家としても知られる。
一橋大学在学中より詩と詩論を発表しデビュー。1974年に仲間とともに版元・書紀書林を構え、翌年、詩誌「書紀」を発刊。70年代の詩的ラディカリズムの先端を担う活動を展開。詩集『胡桃の戦意のために』で芸術選奨文部大臣新人賞、散文作品集『左手日記例言』で読売文学賞、散文集『ベルリンの瞬間』で紀行文学大賞、評伝『伊良子清白』で芸術選奨文部大臣賞、藤村記念歴程賞など受賞多数。また木山捷平文学賞を受賞した小説『猫の客』が2014年、世界的ベストセラーとなった。

最優秀賞　中学生の部

宗左近賞

岩の心

九州国際大学付属中学校　一年　吉永（よしなが）　明日香（あすか）

私は岩である
この地に何年も何年も
座り続けてきた
岩である
もう何年目だろうか
長く座り続けたせいで
忘れてしまった
春夏秋冬
どんな日でも
私はここに座っている
食べ物を運ぶアリたち
色とりどりの世界をつくる花たち
流れてゆく川
私もあんな風に
動いてみたい
空を見上げれば
鳥がつばさを大きく広げ
自由自在に飛んでいる
私もあんな風に
空を飛んでみたい
この狭い世界から
どこか遠くへ行きたい
ああ
腰が痛くなってきた
私が遠くへ行ける日は
来るのだろうか
そう思いながら
いつの間にか
深いねむりについている
私の世界は
ゆっくりと
流れ続ける

みずかみ かずよ賞

日本語が好き

南小倉中学校　三年　細川（ほそかわ）　奈留海（なるみ）

日本語が好き
群青
おかあさん
紅葉
小さな赤ちゃんの手のような
あの紅い葉を
私はもみじと呼んでいたのだけど
あれは楓
もみじというのは
秋
木の葉が美しい赤や黄に色を変えることなの
ですって
紅葉は〝こうよう〟とも読める
きっと意味も同じ
どうして〝もみじ〟なんて読むのでしょう
どうして同じ意味の言葉を二つも作ったのか
しら
ほら、好奇心はつきない
川が流れている
さらさらと
ごうごうと
きらきらと
〝さらさら〟〝なら穏やかな春
〝ごうごう〟〝なら増水で荒れる梅雨
〝きらきら〟〝なら水面に反射する秋の夕日
きっと浮かぶ風景も
人それぞれなのでしょう
同じような意味でも浮かぶ景色や
言葉の柔かさは違う
ささやかな感覚の違いを
こんなにも繊細に表せる言葉があるかしら
そう考えると何故だか誇らしい
ほら　日本語は広い